

## 「祈り母ハンナ」

## サムエル記第一 1章1節～28節

## はじめに

イスラエルに王が立てられた時に、神が用いた預言者がサムエルでした。サムエルは、母の熱い祈りの中で生まれました。今朝は、サムエルの母ハンナの祈りから学びましょう。

## 1 サムエルの母ハンナ。

サムエルの父は、ヨセフの子エフライムの子孫でエルカナという人でした。エルカナには、ハンナとペニンナという二人の妻がいました。子孫を残すことを重視したユダヤ人は、妻が子を産まない、別に妻を迎えました。そのことは、多くの場合、家庭紛争のもとになりました。

## (1) ハンナには子どもがなかった(2)。

ハンナが最初の妻と思われませんが、子が生まれなかったため、エルカナはペニンナを迎えました。ペニンナには子が生まれましたが、ペニンナは、ハンナに子がいないことで、いつもハンナをいらだたせました。

例話：アブラハムの妻サラに子が生まれないのでサラは、女奴隷ハガルを夫に与え、子を生ませますが、ハガルはサラを悩まし、家庭紛争が起きました。

なぜ、ハンナには子が生まれなかったのでしょうか。ハンナは子を生めなかったのでしょうか。聖書は何と言っていますか。「主は彼女の胎を閉じておられた」(5)。ハンナが子を産めなかったのではなく、「主が胎を閉じておられた」のです。「彼はハンナを愛しておられた」(58)ということばは、エルカナはハンナを見捨てているのではなく、彼女を愛して、夫婦の生活が営まれていたにも関わらず、「主が胎を閉じておられた」のでハンナには子がなかったのです。「子は授かり者」と言われますが、子は、主が与えてくださるものであることが分かります。

## 2 ハンナの祈り(10-16)

エルカナは、毎年「会見の幕屋」のあるシロという町に上り、主を礼拝していました。それには、ペニンナとその息子たち、娘たちと、ハンナを連れて行きました。ペニンナは、自分に息子、娘がいることを自慢し、ハンナはその度に悩みました。

ハンナは、心を痛め、主に祈り、激しく泣きました。その様子を祭司エリは見っていました。

## (1) はしためを顧みて

ハンナは、何度も自分を「はしため」と表現しています。「はしため」とは、身分の卑しい奴隷女のことです。神様の前に謙虚な女性であったことが分かります。

## (2) 男の子を授けてくださいますように。

ハンナの祈りは、具体的です。男でも女でも、子どもであればいい、というのではありません。なぜでしょう。

## (3) 私はその子の一生を主にやさげします。

ハンナの祈りがはっきりしていたのは、目的があったからです。ハンナは、主のお役に立つ人、特に、神に仕える人、神に特別に用いられる人を求めたのです。「その子の頭にかみそりを当てません」とは、「神にきよめられたナジル人」にするということです。

## (4) 長く、心のうちで祈る(12-13)。

ハンナの祈りは、長い祈りでした。そして、声に出さない祈りでした。ですから、祭司エリは、ハンナが酔っていると思いました。ハンナは「私は主の前に、心を注ぎ出していたのです」と言いました。ハンナの祈りは、「心を注ぎ出す」祈りでしたが、大声を出したわけではありません。無言の祈りでしたが、真剣な祈りでした。

## (5) 彼女の顔は、もはや以前のようにではなかった(18)。

祭司エリが「安心して行きなさい。イスラエルの神が、あなたの願ったその願いをかなえてくださるように」(17)と言うと、ハンナは帰り食事をしました。すべてを主に委ねたハンナの顔には、悲しみと苦悩は消え、晴れやかになっていました。

## 2 サムエルをささげる(24-28)

### (1) サムエル誕生。

神様がハンナを心に留める時が来ました。そして、ハンナが祈った通りに、男の子が生まれ、サムエルと名付けたのです。ハンナは、乳離れするまで、育てました。その教育は、「この子が主の御顔を拝し、いつまでも、そこにどどまるようになるまでは」でした。

ハンナは、子どもの体を育てただけでなく、その信仰を育てたのです。小さ

なサムエルが「主の御顔を拝し、いつまでもそこにとどまるようになるまで」育てたということです。

## (2) サムエルを主にささげる (24-28)。

ハンナは、時が来て、サムエルをエリの所に連れて行きました。乳離れしたばかりのサムエルは「幼かった」のです (24)。

そしてハンナはエリに言いました。「おお祭司さま。私はかつて、ここのあなたのそばに立って、主に祈った女でございます。この子のために、私は祈ったのです。

主は私がお願いした通り、私の願いをかなえてくださいました。それで私もまた、この子を主にお渡しします。この子は一生涯、主に渡された者です」(26-28)。

**適用：**祈って与えられたら、それを手放したくなくなるのが人情です。しかし、ハンナは信仰の人でした。主に誓ったことは、破りません。誓いの通りに果たすのです。

そして、ハンナに育てられた幼いサムエルは、母の気持ちと自分の使命を理解して従い、幼いながらも、主に仕えていきました (2:11)。

マリヤは、イエス様をささげました。そして神様は、私たちのために「ひとり子」をささげてくださったのです。

私たちの今の救いは、このように、多くの人々の信仰によってもたらされているのです。そして、私たちの信仰もまた、人々を主の祝福へと導くのです。

## 3 ハンナへの神の祝福 (1:21)。

ハンナがサムエルをささげて後、ハンナを祝福し、3人の息子と2人の娘をお与えになりました。

### 結論

主の民を、主の祝福へと導いたサムエルは、母ハンナの祈りによって生まれ、育ちました。私たちは、幼児教育がどれほど大切かを教えられます。

昔のことわざに「三つ子のたましい百まで」とあります。ハンナの子ども教育は、子どもが胎に宿る前から始まりました。そして、生まれると、自分でしっかり育てました。その教育は、体を育て、心を育てるだけでなく、「主の御顔を拝し、いつまでもそこにとどまるように」する教育でした。

その秘訣は、祈りでしょう。主の前の祈りなくして子育ては出来ません。

子育てと信仰は別と考えてはならないのです。使徒パウロは「主の教育と訓戒によって育てなさい」と言っています。

明確な教育目的を持って、主の助けと、祈りによって、こども達を育てていきましょう。

祈りについては、ハンナやマリヤを模範にしましょう。

例話：キリスト教指導者の中でも有名なアウグスチヌスは、敬虔なクリスチャンの母モニカに育てられましたが、マニ教という異教に走り、放蕩し、身分の低い女性と同棲し、子どもまでもうけました。心配の母は教会の牧師に涙ながらに相談すると「涙を流す母の子は滅びません」と、励まされ、涙ながらの祈りを続けました。その祈りが聞かれ、アウグスチヌスは回心し、やがて歴史に残る偉大な指導者になりました。

#### 勧め

神様は私たちに、「祈る」という特権をお与えくださいました。「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝を持ってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい」と聖書は進めています（ピロ 4:6）。

ですから、私たちもハンナにならって、どんなときにも祈り、神様の導きと助けを求めて生きる者とならせて頂きましょう。